

---

# 茜の呪刻

シロヤマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

茜の呪刻

### 【Nコード】

N1382T

### 【作者名】

シロヤマ

### 【あらすじ】

没落呪術師の家系の娘・茜が拾った狐。

それを発端として、彼女が巻き込まれる呪術師たちの諍い。

いつかきつとラブリチャになるはずの、和風ファンタジー。

某所で執筆しています小説の加筆修正版になります。

## 第一話（前書き）

すみません。種別を短編として間違って掲載しました。こちらが連載となります。

短編はこちら《<http://ncode.syosetu.com/n1379t/>》第一話まるまるです。汗

## 第一話

「この墨原家は代々佐和の国、帝に仕える術師の家系だ。術力は血の中に溶け込み、己と一体となっている。ゆえに、力とは血、血とは力だ。我が一族は、この「血」ゆえに帝に仕えていた。だが、憎き清原家の策略により、宮廷を追われ、術師として『このよう』立場に甘んじねばならない屈辱っ」

カッコン。

庭の獅子脅しの音が響く。

都の喧噪からはほど遠い、この屋敷の主―口髭を生やした男は、瞼を固く瞑り目の前に『居るであろう』二人の子供たちに語りかける。

「よいか、茜、葵。

お前姉弟は我が墨原家再興の切札」

カッコン。

「憎き清原家より宮廷術師の座を奪い返し、けちよんけちよんに――」

カッコン。

「あなた、あなたってばっ」

カッコン。

「ああ、なんだ？」

「茜も葵もおりませんわ」

この国——佐和の住人にとってはかなり珍しい茶を帯びた髪の色をした女性は、口元に袖口を当ててくすくすとほほ笑む。

その微笑みに口髭を生やした男はとろーんと、なんとも無様——みっともない——、威厳もへつたくれもない表情で、二人は見つめあう。

カッコン。

「はっ！？」

男は突如声を上げ、立ち上がりあたりを見る。

「天音！？茜と葵は！？」

どこに行った！？と女性——天音にくらいつく。

「茜は、『小田部』（おたべ）に行きましたわ。葵は、そうですわね…、きつと清十郎先生の所ですわ」

小田部とは、この佐和の国の都にある甘味処の店の名前であり、清十郎は医師の名前だ。

その二つの名を聞いたとたん男は怒声を上げた。

「ぬわんだと——！！！！あの二人め！！わしの話中に逃げ出したというか！？」

「ふふふ。良いではないですか？今日は、あなたと私の二人きりですわ」

天音は男にそつと寄りかかり、その唇に……

「おかあさまあ！！！！」

突如、すぱーんと襖を開け放ち乱入してきた少女によって甘い雰囲気  
気が吹き飛んだ。

「大変です！お母様！谷五<sup>たしろう</sup>六<sup>く</sup>さんで、大根が大根が——！」

少女は抱えた大根を天音に突きつけ、唇が触れる寸前で止まった天音に満面の笑みで叫んだ。

大きな瞳を輝かせ、大根を抱えて小躍りをする。

腰までの長い、佐和の国の住人より若干色の薄い黒髪の毛先がぴよこぴよこと跳ねた。

「安売りしていましたっ。3本で、1文です！ちよつと痛んでますが、見てください！今日は、大根が食べられますう…っ」

「あら！まあ！では、さっそく今晚の夕食に出しましょう！あなた、今日は大根が食べられますわ！」

ぽかんと口を開けた男は、ぱくぱくと口を開閉し始める。

甘いひと時を、嵐の如くやって来た少女―男の長女<sup>むすめ</sup>に対して、カッと頭に血が昇る。

「あ、茜~~~~~!!!!!!」

うらみがましい声で、少女――茜を怒鳴る。

茜は、うげつと声を上げ大根を天音に押し付け、

「では！お父様、お母様！今日のお勤めに行つてまいります！」

「さて！茜！！おまえの務めは甘味処で給女の仕事をするのはなく呪術師として腕を磨き！憎き清原家より宮廷術師の座を奪い返す――！、こうらあ!!!!!!茜~~~~~!!」

まくしたてる男に、茜は風のごとく来た道を戻る。

「あかね――！！！！！！！！！！」

耳をふさいで走る娘―茜に父親の絶叫は届かなかった。

\*\*\*

墨原茜、16歳。

この、佐和の都に居住を構える元宮廷術師「墨原」家の長女だ。

「んーっ！今日もいい天気っ」

背伸びしながら、店の前を行き交う人々を見ながら洗濯日和だわとのほほんとつぶやく。

「茜、あんみつ上がったよ」

甘味処「小田部」の女将が台の上にあんみつと番茶を置く。

「はい」

出されたあんみつを盆の上に置き、椅子に腰を掛ける老女にあんみつを渡す。

「ごゆっくりどうぞ」

につこりと笑い、番茶も置いておく。

「お鈴さん。私、これから河部で豆剥きの仕事が入ってるから」

「そういえば、そうだったね。ん、いいよ。上がって…、ああそうそう、茜。最近夜になると頭巾をかぶった変な奴らがうるついつて話聞いたかい？」

お鈴と呼ばれた女将は、前掛けで手を拭きながら溜息をつく。

「あんたのことだから、夜遅くの仕事は受けないと思うけど物騒だから夕方には家に帰るんだよ？」

「もちろん。最近の都、なーんかざわついているっていうか…」

「術師としての、カンってやつかい？」

墨原家と言えば知らぬのは赤子だけとまで言われた、没落つぷりだが術師としては一流の血筋だ。

そして、その一流の血が茜もまた流れている。

「んー、どうかな。私は、お父様みたいに『何かが見える』なんてことはないし」

「っ、な、なにかって、なんあななんさ!？」

お鈴は、ずざつと茜より離れ厨房の柱の陰に隠れる。

（お鈴さんこの手の話苦手なんだよね〜）

くすくすと笑いながら、茜のいたずら心にぽつと灯が灯る。

柱の陰に隠れて、カタカタと震えているお鈴は茜にとっては、母と同じ年代の女性だけれど、人生の先輩だとは思えなくどちらかと言うと、とても気の合う友達のような関係だ。

だからこそ、こう、

いたずら心に灯が、ぽつと灯る。

「何かつて、たとえばゆ——」

そう、たとえば、幽霊とか。

そう、にんまりと笑う茜が言葉を発した瞬間、

「いらつしゃいませ————————！！！！！！」

暖簾をくぐって入ってきた男に、お鈴は飛びつく勢いで悲鳴のような声を上げた。

「のわっ！？」

男はのけぞりながら、お鈴に引きつられ席に座らされ、茶をどんと置かれ、

「ささささつ、さ！どどど、どうぞー！」

お客である男―茜の知る限り―常連客に、ひきつった笑顔を向ける。さらにお客である男はそんな女將に身を引きながら目を白黒させていた。

茜は小さく嘖き出して、

「じゃあ、お鈴さん私、上がりますね。基晴さんもゆっくりして行つてね」

入ってきた常連客の男―基晴に茜は笑顔を向けて、荷物をまとめて出て行った。

「……………」

基晴と呼ばれた男は、啞然として出入り口にはためく暖簾を見た。お鈴は肘で基晴の頭を突き、

「あー、残念だったねえ、基晴。もう少し早ければ、茜とたんまり喋れたのにねえ」

やれやれと男の脳天をぺちぺちと叩いた。

「姐さん…っ！誰のせいでっ！だいたいっなんだよ！いきなり叫びだして！」

その肘を手で払う。

茜に会いたくて店にやって来たのに、言葉を交わす前に一瞬で、すべてが終わった。

基晴は、がっくりと頂垂れる。

ちよつと悪い気がしたのかお鈴は苦笑いを浮かべてこっそり耳打ちする。

「これから河部で豆剥きだつてさ。最近物騒だから、誰か迎えに行つて、送ってくれる人がいるとあたしは助かるんだけどな」

基晴がお鈴の顔を恨みがましく睨みつけ、

「ぜんざい、一個」

不貞腐れたように、机の上に突っ伏した。

河部で豆剥きの仕事を終え、茜色に染まる空を見上げながら茜は一人帰路を歩いていた。

墨原家。

かつて、都一の呪術師として知れ渡っていた一族。  
そして、——堕ちて行った一族。

この佐和の国には、呪刑という死よりもっとも厳しい刑がある。

呪いによって、動物に変えられ冷魅<sup>れいみ</sup>と呼ばれる谷に落とし——その姿のまま一生を終える。

谷に落とされた時に、死したのならばまだ救いだろう。だが、生きて谷底についた場合弱肉強食の谷の世界が待ち受けている。

そして、墨原はその術を行う第一人者だった。

宮廷術師の入れ替わりは、至って簡単。

その、呪刑を破られたのならば——それまで。

当時の墨原家の当主・雅盛の術が破られ——それまで、媚へつらっていた貴族・豪商たちは蜘蛛の子を散らすようにあっという間に墨原家は衰退していった。

今では、国で知らぬものは赤子だけの没落ぶりだ。

屋敷があるだけでもまだ良いと、茜は空を見上げながら思っていた。  
父は、ある日突然こう言い出した。

「清原憎し！打倒清原！！！」と。

彼女の父親はお家再興を望み術師として姉弟を育てようとしているが、そんな事をしているくらいなら町に出て小銭を稼いだ方が豪勢な食事にありつける。

米を買うのもやっとで、粥にして毎日食べている。

「んーっ」

背伸びをして、豆剥きでこった肩を揉みほぐす。

「今日は久々の大根！大根だよつ。大根の葉っぱのお浸しもおいしいんだよねっ」

浮き浮きとしながら、茜は鼻歌を歌いだすと、

「ん？」

小さな『鈴』の音が聞こえた。

『リーン…』

(?)

ぞわりと悪寒が走る――、見られている？

茜は周囲をせわしく見る。

誰かに見られている――、そんな『感じ』がする。呪術師としての本능が警告を促す。

じとり…と、背中に嫌な汗をかきつつも、懷にそつと手を忍ばせる。握りしめた数枚の『紙』。

呪術師が扱う術を生み出すための依代となる呪術師の術の媒介。

(……、なんだろう…なにこれっ)

茜にまとわりつく気配。

じりじりと気がつくつと、僅かずつ後退をしていることに気付いた。

『リーン…』

鈴の音と共に、ふっ…と気配が消えた。

「…？ なんなの…、一体…」

呆然と懷から手を抜いた。

どつと疲れが身体にのしかかる。

「うう…もう…」

帰って寝よう…。そんなことを考えながら茜は歩き始めた。  
そして、足を止める。

とても、小さな、『鳴き声』が、聞こえた。  
立ち止まり、草むらをじっと見つめる。

「きゅ…っん」

「？ 動物？」

苦しそうな鳴き声にたまらず草むらの中に入り込み、『ソレ』を見つけた。

黄金色をした、毛並みの良い、『キツネ』。  
だが、

「っ、すごい怪我じゃないっ」

その腹部は赤く染まっていた。

## 第二話

\*\*\*

薄闇の広間にて、数名の呪術師たちが小さな篝火を囲っていた。

「それはまことか!？」

一人の男は術衣を乱しながらも声を上げ、

「帝の居場所が判明したのか!!？」

「はい。先程『網』にかかったようです」

「なんと!」

「では帝はご無事か!！」

口々に呪術師たちは声を上げた。

だが、それを伝えた男は口ごもり、

「それが…、我々がその場所にたどり付きましたところ…」

あったのは、血痕のみ。

「……なんと…」

男は震えた声で呟き、額に手を当てた。

「帝、帝はいま…」

いずこに…。

\*\*\*

丁寧に怪我を手当てされた狐が布を敷いた籠の中で丸まっている。  
茜の5つ年下の少年・葵は狐の手当を終え、か細い息遣いの狐をじ

つと見つめていた。

父親と同じ漆黒の髪の色に、少し焦げ茶かった眼。葵は『キツネ』を見通すかのように、――じつと見つめていた。

「葵。そんなにじつと見てたら、キツネさん休めないでしょ？」  
後ろからギュツと抱きついた茜から逃れようと葵はあわてて身をひねる。

「姉さん、いつまでも子供扱いしないでよっ」

「なによ。昔は、姉さま姉さまって、言ってくれたのに……。清十郎先生の所に行ってから、冷たくなってきてるわ」  
さらにぎゅーと、抱きしめる。

「うみゃひっ」

奇声をあげて、葵はもがく。

ぎゅうぎゅうと茜の柔らかな身体にからめ捕られ、慌てさらにもがくがまだまだ体格が茜に劣る子供の葵は茜に良いように抱きつかれるだけで終わる。

ピクンつと狐の耳が動く。

「ねっ姉さま！狐の目が覚めたじゃないか！」

「葵が騒ぐから目が覚めたんじゃないの」

かすかに体を動かす。狐は体を起こそうと力を使っているようだが、

「駄目だよ。君は、怪我をしているんだから」

葵は茜の腕（というか、身体）から逃れ、そつと頭を撫でる。  
気持ちよさそうに眼を細める狐に、

「ねっね！私も触りたい」

茜は猫にするように、首の下に指を入れ撫でる。

「それは……、どうかと思うんだけど？姉さん」

「あ、姉さんに戻ってる。」

茜は残念そうにつぶやくと、狐と目が合う。

かぶ。

「……………」

「ねえ、葵？ 噛まれてないけど、これって食べられてるの、かな？」  
「あー…。ははは、じゃれてるんじゃないかな？」

隣で固まった姉と、はむはむと姉の指を口に咥える狐。  
狐の口から指を取り出し、唾液でべったりとなった指を懐から懐紙を出し拭く。

「葵、私、今日はもう休むことにするわ…。キツネさん任せてもいい？」

「うん、いいけど…」

何か言いたそうにしている葵に茜は肩をすくめる。

曰く、何も言うな――だ。

「キツネさん、葵はお医者さんを目指しているの。葵に任せたら、きつと傷なんてあつという間に治っちゃうんだから」

「姉さん、それはないから。術でも、傷を癒すことはできないのに、相手が動物だからってあつという間、とか変な嘘つかないでよ」

呆れたようにため息をつく葵とキツネの入った籠を持ち上げる。

「じゃあ、部屋で看病するね」

「うん、宜しくね」

居間より出ていく葵の背を見つめ、父と母がいるであろう寝室に目を走らせる。

血まみれのキツネを見つけた時に感じた――違和感。

あのキツネは、呪刑を受けている…かもしれない…。  
ごくりと喉を鳴らす。

多分、あの鈴の音はキツネを探している呪術師の『網』の音だ。

厄介なことになった…のかな…？

茜はそう心中毒づきながらも、――助けたことには決して後悔はしていない。

\*\*\*

カツコン。

獅子脅しが夜の静寂の中響く。

キツネを見た瞬間の父の視線の険しさと言ったら、茜の『もしかしたら』を決定づけた。が、傷の手当てなど何も異を唱える。逆に、早く屋敷の中に招き入れた。

父と娘は向かい合いながら、ただ睨みあっていた。

「狐の具合が良くなるまで、屋敷に置いてくれとな…？」  
唸るような声を上げる父親に、

「だめですか？」

「駄目…と言っているわけではない。が、獣を飼うには金がいるぞ」  
「お父様、誰のおかげでご飯にありつけると思っているんですか？」  
につこりと満面の笑みを浮かべる茜に、父はうめき声を上げる。

黒墨家、当主―秋守は澄まし顔の娘に大きくため息をつく。

「お前も気づいているはずだ」

「そうですね」

「ならば、『何故』？」

秋守の瞳が鋭く茜を射抜く。

下手な言い分では、決して許さないと視線で言われている。

茜は負けずと、父親を睨みつけて、

「呪術を受けている、それは『呪刑者』。咎人と知って助けるのは大罪ということを理解しています、が、お父様。私は、消えゆく命を見捨てられるほど、強くはありません……」

「……、つまり、茜。おまえはただ、『アレ』が死ぬのが嫌だというわけか？」

「とりあえずは、そうです」

とりあえず、といった娘の顔をまじまじと見つめ、張りつめた空気が一瞬和らぐ。

腕を組みながら、秋守は苦笑いを浮かべる。

「所詮、私の娘ということか……」

「あたりまえです。おじい様に勘当されて、黒墨を捨てた男の——娘の茜です」

黒墨家の当主たる秋守は家を捨て、下民として暮らしていたところがある。

茜はそれを口さがない呪術師や貴族——または町民によってあれこれ吹きこまれていた。

一時期はそれによって、親子の確執もあつたりはしたが……現在は良好なはずだ。

カコン。

獅子脅しが、響く。

満面の笑みを浮かべる、父と娘。  
そして、

「あらあら。ちょっとやけちゃうわ」  
のんびりとした母の声が響く。

天音はニコニコと微笑ながら、

「茜もあなたも秘密事？」

小首を捻る。

茜はキツネの事をどうしようかと一瞬、秋守に視線を向けたが秋守の青から白へと変わる顔を見た途端――何も言わない方が身のためだと口を貝にする。

秋守はいや、なんだ、その、あれだともごもごとつぶやいているが天音の微笑みは揺るがない。

「あ、な、た？」

ひっと短く悲鳴が聞こえたような気がしたが、茜は身を縮めて茜に對する天音の無言の威圧を耐える。

どういうわけか、家族の中で一番の『支配者』は母親だった。

父いわく、天音がいないと死んでしまう、らしい。

なので、幼いころから「母様を困らせるな、泣かせるな、怒らせるな、マジで」と言い聞かせられてきた。そして、時に秋守がこつそりと散財すると天音の何かがキレる。ぷつつりと。

その様はまるで『鬼』のようで…。

二人の姉弟は、一方的に泣く父親の（無様な）姿を脳裏に焼き付けられ――母逆らうべからずという家訓ができた。

「あー、なんだ。問題ない。まるっきりなんでも問題はない。大丈夫だ、ああ、大丈夫だ」

「そうですか」

カクカクと頷く秋守に天音は微笑を向け、

「そ、う、で、す、か」

一瞬黒い炎が立ったように感じた。

茜は明日早いので！と声を上げその場を逃げる。その際に、父の逃げやがった！！という絶望的な顔を見なかったことにする。

（明日、お父様の料理に一品多くつけれるように、しよう…）

小さな謝罪は言葉より、お腹で満たしてもらおう事にしよう。  
そんな風に、小走りで部屋へと戻った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1382t/>

---

茜の呪刻

2011年10月5日22時14分発行